
岩物語

ねむりねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砦物語

【コード】

N4598BA

【作者名】

ねむりねこ

【あらすじ】

王国の中にある特殊な役割を持つ砦。その中に住む面々と魔法や妖精に係るなんというとは無い日常。

一話 狩り

「アルトー、そっち行っただよー」

鈴を転がしたような、と言っものが相応しいような少女の音が、姿は見えないのに遮られることなく耳に届く。長閑な午後似つかわしくなく緊張を孕んだアルトに、少女の声は面白そうに付け加える。

「逃がしたらお仕置きー」

「なんだ、お仕置きって!？」

のほほんとした声に言い返しつつ、アルトは向かってくる獣に目をやる。どどどと地響きを立てながら真っ直ぐに疾走してくるのは、どう見ても特大のイノシシ。立派な牙が目に入り、アレに当たったら痛いだけじゃ済まないんだろっような、とアルトは頬を引きつらせる。

「ちょ、これ止めるのムリだろ!？」

防具をつけてもがっしりとした体格とは言えない、むしろ成長途中特有のほっそりとした身体つきのアルトに、力技でどうにかしろというのは酷過ぎる話である。

「魔術使ってよーし」

まあ、それならなんとか、と構えた途端、「ただし」と続けられる。

「麻痺系不可、焦げると味が落ちるから火炎系・雷系も不可ー」

「うええ!？」

使い勝手のいい系統を不可にされ、アルトは慌てて使える魔術を探す。もちろんその間にイノシシが止まってくれはるはずもなく、あわあわとしている間にも距離は勢い良く縮まっている。いざとなれば避ければいいのだろうが、そうすると少女曰く『お仕置き』が待っている。これまでやらされたのは全館トイレ掃除やら物置の掃除やら全員分の洗濯やら　ハッキリ言って雑用なのだが、だからこそ遠慮したい。

「降参ー？」

「するか！我が前方の敵を止め、土障壁！」

一番簡単な印を指で描いて左手をかざすと、見る間に地面が盛り上がり壁となる。出来上がった途端、ドンッ！と豪快な音を立てて壁が揺れた。どうやら突進してきていたイノシシは、壁を避けることができずそのままぶつかつたようだ。確認のために壁の横から様子を窺うと、かなりの勢いでぶつかつたためか運良く気絶していていた。また元気に暴れられても困るのでさくつと止めを刺しておく。

「・・・大きいな」

自分と同じ程の体長のイノシシを見下ろし、アルトはさてこれをどうやって持ち帰るのだろうかと首を傾げる。そこへ先程から声をかけていた少女が軽い足取りでやってきた。いつもは両側にみつあみのおさげに垂らしている黒い髪を、今日は邪魔にならないように纏め上げている。痩せた肢体は貧弱に見えるが、こう見えて持久力はかなりある、らしい。実際イノシシを此処まで追い込んできたのはこの少女だ。

「一応合格。でも微妙ー」

言われた通り仕留めたというのに、少女の顔は不満げだ。

「あのな、リイル。麻痺はダメ、火も雷もダメって言ったのお前だよな！？」

「それは当り前。麻痺術使うとたまに魔力残留しちゃってお肉が不味くなるし、食べた人が麻痺することもあるんだよ？火や雷は言った通り調理する前に火を通してどうすんの。ついでに言うと、毛皮も利用するから焦がしたら勿体ないでしょ」

「あーそうですか」

つらつらと並び立てられたことは至極もつともであるが、麻痺させた獣の肉を食べると麻痺するというのは初耳だった。だが、そもそもが非常識の塊であるこの森であればそういうこともあるのかもしれない。

「で、何が微妙かって言うと。今回はたまたま障壁壊れなかったし、ぶつかって気絶しちゃうお間抜けなイノシシで助かったけど、障壁破られたり獲物が跳び越えちゃうくらい元気だったりすると、自分が怪我しちゃうかもしれないなかったんだよ？」

諭すように言われても、まだ15歳半ばのアルトは素直に頷くことができず、つい反抗的に言い返してしまふ。年嵩の相手であればまだ素直に聞けたのだろうが、言っている相手は見た目は自分よりも幼く見える少女だ。

「壁は壊れなかったし、なんともなかったただらうが」

「可能性の話をしてるの。で、びみょう」

「・・・どうしろと」

アルトの素直じゃない態度にも慣れっこなリイルは特に気にするでもないが。

「結界張って、風か水で斬ればベストかなあ」

「そんな細かい詠唱する暇あったか！？ないよな!？」

結界と攻撃魔術両方唱えることは出来なくもないが、転がってる巨大なイノシシを切り裂くほどの風や水の魔術となるとそれなりに長い詠唱文になる。極短時間で両方唱えられるとは思えない。そんなアルトにそれがどうしたとばかりにリイルはにつこりと微笑む。

「詠唱短縮できるようになれ？」

何故に疑問形？と思いつつ、そのお気軽過ぎる発言にアルトは怒鳴りつけていた。

「気軽に言っちな！」

「や、できるできる。この森の中なら」

にこにこなんでもないことのように手を振るリイルを見ていると、真面目に言い返している自分がおかしいのだろうかとアルトは思う。いつもいつもこの調子で言い包められている気がする、と、疲れたように肩を落とす。

「・・・無茶言っちな、この能天気娘が」

「ぬ？そういうこと言っ子にはおやつなしですよ!？」

能天気と言われたことが気に障ったのかもしれないが、言うに事欠いておやつで脅すとはいったいリイルは自分のことを幾つだと思っているのだろうか、とアルトはちよっぴり悲しくなる。

「おやつ出すのはお前じゃないだろうが!？」

「サテイスはわたしの味方ですよ!」

サテイスはアルトとリイルが所属する皆の厨房を預かる美人のお姉さんである。彼女の作る料理やお菓子はとても美味しい。

「よし!じゃあ、僕の方はお前が食べるんだよな?サテイスにはそう言っというてやろう」

おやつを抜かれたくらいでアルトが困ることはない。サテイスのお菓子は美味しいので惜しいとは思うがそれだけだ。そしてアルトはリイルが何を苦手としているのか既に知っている。この痩せた少女は食事にしろおやつにしろ一度に食べる量がとても少ない。食べることは好きらしいのに難儀なことだ。だから何かにつけてたくさん食べさせようとすると困ってしまうらしい。

案の定、わたわたと慌てだし視線がさまよう。

「あああ、いえ、わたしはいつもの量で!アルトの方はきつとリックが食べてくれます!」

「遠慮しなくていいぞ。たくさん食べて大きくなるとな?」

にんまりと笑ったアルトの視線が、何とはなしにリイルの薄い身体を捉える。

「どこ見えますか!?! 同い年なのにアルトは失礼です!」

「同じ年に見えないから言ってるんだよ。いやもうほんとに。言われたくないなら年相応に育て?」

これは本気で心配して言ったのだが、リイルには地雷だった。知ってはいたが。

「うう。ひどいです。アルトのばかー!」

半べそになったリイルはアルトに背を向けて駆けて行ってしまった。

残されたアルトは溜息を落としてつつ横を見る。目に入るのは小山

のような巨大なイノシシ。そしてアルトが戻るべき場所は此処からかなりの距離がある。

「・・・これ、僕一人で持ち帰って言うのか？・・・カンベンしてくれ」

どこかでくすくすと笑う声が聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598ba/>

砦物語

2012年1月12日16時46分発行